



Title	第二部 部局史 . 実験生物センター
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 1153-1154
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28199
Type	bulletin (article)
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_1153.pdf



[Instructions for use](#)

実験生物センター

実験生物センターは、理学部附属の温室、実験用動物飼育室、齧歯類飼育室、ミツバチ実験施設を母体に一九八一年に学内共同教育研究施設として設立され、一九八二年三月には以前に植物温室のあった理学部西側に新センター棟が落成し、供用が開始された。当時の多様化する生物学の要請に応え、脊椎動物はもちろんのこと、無脊椎動物、植物など、様々な生物を使った多彩な研究の支援を目的としたものであった。総床面積は一六〇五平方メートル、ラット、マウスなどの小型哺乳動物飼育室、昆虫等の小生物飼育室、植物培養室、水槽室、ガラス室、低温室等が設けられ、屋外には実験用圃場（一六八四平方メートル）がある。また、地下には容量一万リットルの海水タンクを備えている。専任職員は助手一名、技官一名である。非医学、獣医学系の生物実験施設としては国立大学ではほとんど唯一の学内共同利用施設であり、その存在価値は高い。現在、全学の五〇を超えるグループによって微生物、藻類、顕花植物、様々な無脊椎・脊椎動物を材料とする七〇前後のテーマについて研究が行われているほか、近交系ラット、マウスや各種植物系統の維持も行っている。特に、本センターで発見し樹立したLECRラットは、肝炎、肝癌、ヒトWilson病のモデル動物として広く実験に供されている。近年、生きた生物材料を用いる実験研究には生物倫理にも十分な配慮をした研究計画と設備が要求されるようになった。したがって、当センターのような研究支援を目的とした生物飼育実験専門の施設の重要性は時を追って増すものと考えられる。なお、本施設は遺伝子実験施設および理学研究科附属動物染色体研究施設とともに二〇〇一年四月に先端科学技術共同研究センターに統合される予定である。

（執筆 片倉晴雄）